

推理小說

不眠都市

樹下太郎

東都書房



不眠都市

定価 290円

昭和37年5月5日 第1刷発行

著者 樹下 太郎

© Taro Kinoshita 1962

発行者 西村 俊成

印刷所 株式会社常磐印刷

製本所 大製株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話(941)3111 振替(東京)72732

落丁本乱丁本はおとりかえします



推理小說

不眠都市

樹下太郎

東都書房



裏街

昨夜のつづき
157

孤独な脚
174

秋の雨
191

結婚して
207

夜の噴水
122

嫌いな町
95

冬の人びと

片隅

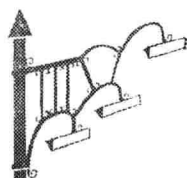


周辺

殺害翌日
7

無分別
23

死体挿話
56



周辺



殺害翌日

1

なんとかしなければ……。

かよ子は物置に置いてあるものの始末に頭を痛めていた。

昨夜の九時頃、かよ子は、ひとり、それをやっとの思いで物置の中に運びこんだのである。以後、一睡もしていない。

それをいかに処理すべきかという心配のほかに、多分にそれに恐怖を感じていたからでもある。

たとえどんな死体であろうと、死体はあまり気味のいいものではない。

気味が悪いからゴザをかぶせてあるのだが、ゴザをかぶせたからといって死体が死体ではないなにかにかわってくれはしないのだ。

ひと晩中、死体の幻影は彼女の臉のうらや頭の奥で、大きくなったり、小さくなったり、眸を

ひらいたままで、存分に暴れまくったのである。しゅんと硬直した死体がその無惨な姿勢をいささかも崩さずに暴れまくるのだから、その無気味さといったらなかった。生きているときのように動いてくれ、と、叫びたくなった程である。

もちろんそれを夫に見られてはならないのだった。

その夫は、仙台の出張から今晚帰る予定である。おそくも十一時には戻ってくるはずであった。

それまでにゴザの中身をなんとか始末しなければならぬ。

死体は少なくとも四十五キロの重さを持っていた。彼女ひとりでは到底扱い兼ねる重量と体積であった。昨夜物置へ運び込むことができたのは奇蹟といってもよく、おそらく恐怖と興奮で異常な状態に置かれていたからにちがいない。火災の際中風の老人が軽々と長火鉢を中庭までかつぎ出したという話と同断である。

明るい朝が、かよ子には嬉しかった。少なくとも恐怖からは解放されることができたからだ。ただし恐怖は同じ重さで、焦燥しょうそうにすりかえられた。なんとかしなければ、という焦燥。別な見方をすればこれも恐怖の一種といえるかも知れない。

彼女が雨戸をくり庭に降り立ったとき、柱時計は七時を打った。

夫の帰宅を十一時とすれば、あと十六時間しか残されていないということだ。

いや、十六時間ではいけないのだ。仕事が都合よく運んだとき、ひと列車早いのに乗って帰ってくることもあるからである。その場合も計算にいれるとすると、午後九時、十四時間というこ

とになる。しかも、夫を迎えるとき平静でいられるようにするためには、さらに一時間の余裕は必要であろう。

午後八時までになんとか始末をつけよう、と、自身にいい肯かせた。あと十三時間である。

朝日に向かって、大きく両手をひろげた。

ようやく冬らしく、空気が冷たかった。その冷たさに爽やかさを覚えた。

敷地五十坪。その上に十五坪の平屋を建てて夫婦は住んでいるのである。

かよ子は西に首を向けた。秩父連峰があった。山頂は雪、雪のひだが山の間あたりまで優雅なひろがりを見せていた。稜線がくっきりと青空との境界を示しているのは、おそらく空気が澄んでいるせいにちがいない。

埼玉県草折町。

最近、都心へ通うサラリーマンたちの住宅が、次々と建てられつつある一劃であった。ついに武蔵野のはてにまでひとびとは住居を求めはじめたということである。

ただし、まだ、武蔵野のただずまいは傷つけられてはいなかった。雑木林も丘陵も、清冽な細い流れも、そのままに残されているのである。

かよ子の住んでいる付近は、小綺麗な住宅と農家とがおおよそ半々の割合で、武蔵野の風光の間に散在しているのだった。

私鉄の駅から歩いて二十分の距離にあった。かよ子の家の前の道を南へさらに四キロばかりゆくと関東の名利があり、私鉄のハイキングコースのひとつになっていた。

サラリーマンたちは、毎朝、そのハイキングコースを自転車やバスで駅に向かうのであった。自家用車を持っている連中は駅の少し手前の十字路を東に折れる。狭い赤土の道を一キロ半ゆくと広い県道に出られるのである。

要するに、現在のところ草折町はまだ田舎であるということだ。

かよ子の家の玄関は西側の道路に面していて、裏手は大きな農家であった。農家のひいらぎの生垣が、かよ子の家との境いになっていた。

その生垣と物置の間は、一メートル程の幅で空地になっていた。生垣の向こうは農家の納屋になっていて、空地は年中じとじとしている。

その空地に死体を埋めよう、と、かよ子は思い立った。時間と睨みあわせて深い深い穴を掘るのだ。

そうと計画がきまると、憂鬱と焦燥がそれまでの半分程に減った。

同時にかよ子にはげしい空腹を覚えた。いやという程詰め込んでやろうと思った。すき腹では重労働に堪えられるわけがない。

ほうれん草の味噌汁をつくり、卵をおとした。ご飯をたっぷり二杯食べた。

スラックスに穿きかえた。スカートなんかでできる仕事ではないのだ。

かよ子は二十六歳、小柄な女であった。スタイルはあまりよくないがかた肥りで筋肉がひきしまっている。三十六歳の夫の定夫はそんな妻の肉体を愛して——というより溺れていて、愛撫は執拗だった。『おまえのからだはシコシコしているねえ』——かれは寝物語によくそんない方

でかよ子の肉体を賛美するのであった。

かよ子は、夜の夫のけものじみた愛撫が大好きであった。小さなからだを滅茶苦茶によじらせるのであった。

スラックスを穿くと、尻から腿^もにかけての線が極端にあらわになった。はちきれそうな感じになるのである。夫はそれを嫌った。おそらく嫉妬なのだろう。『なるべくタイトスカートやスラックスは穿くな』とはっきりいわれたことがあるくらいである。

が、この際、スラックスを用いないわけにはいかなかった。

縁側へ出て運動靴を穿いた。

スカーフを三角にして髪を掩う。

上着はメリヤス編みの赤いセーターだけだったから、ひどくスポーティーな服装になってしまった。

あとはスコップ。

スコップを物置に藏ったことを思い出した。

ぞっとした。

埋葬のときがくるまで二度とそれを見ないですむと信じていたからである。たとえゴザをかぶっているにもせよ、やはり眼にしたくなかったのだ。良心の疼^{うず}きもある。

かといって、他人の家に借りにゆくわけにはいかなかった。わざわざ疑いを持たれにゆくようなものだからである。

勇気を揮って、鍵をあけ、扉をひらいた。

酸っぱいにおいがむっと鼻を衝いた。一坪ばかりの小さい物置で、しかも空気の流通を無視した建て方だったから、ひと晩で屍臭がこもってしまったのだ。夏でなくてまだしも、ということである。

朝食のものをそっくり吐き出しそうになった。

呼吸を止めるようにして、なかば手探りでスコップの柄を握った。素早く扉をしめ、そこから離れた。庭の真中へくるとうずくまり、しばらく両手で顔を掩ったまま、吐き気に堪えた。

屍臭は、原因が毒物死であるために、一層はげしかったのかも知れない。

それにしても、なんともいいようのないくさった、嫌なにおいであつたことか。

▲殺すなんて二度とごめんだわ▼

一方、屍臭が原因となつて夫に嗅ぎつけられるかも知れないという心配も新たに生まれた。あとでその方の処理も忘れずにすまず必要があると思つた。殺虫剤を思いきりぶちまければなんとかごまかしがきくのではないか。

夫の定夫は妻のかよ子と同じくらい新しい住居を愛していて、しかも几帖面な性格であつた。出張から帰った折には、必ずひと通り点検して回る癖があるのだ。かよ子の肉体をたしかめるのと同じ綿密さで、なめるような視線で縁側の下まで覗きこむのである。

屍臭だけは、だから、絶対にさとられてはならないと考えたのだ。

死体を埋め屍臭を消す。

△それで一切は終わりなんだわ▽

かよ子は自分自身にそういう肯かせた。

吐き気はようやく納まったらしい。めまいが少し残っている程度である。

座敷から、柱時計の鐘がひとつ打ったのがきこえてきた。

八時半。

あと、十一時間半である。

かよ子は立ち上がった。スコップを握りしめて、物置の裏手へ歩いていった。

頭の中に死体を思いうかべながら、それにふさわしい大きさの矩形を土の上にスコップで描いた。

予想以上の重労働になりそうであった。

2

五分と経たないうちに全身が汗ばんで気持ちが悪かった。額には大粒の汗である。

深さをせめて一メートルは必要だと考えていたのだが、この調子では^{おほつか}覚束ない。

無理もなかった。

一昨年結婚するまでの五年間をタイピストとして過ごし、結婚してからは夫に大切にされている新妻であった。重いものを持ったことといえば、大掃除と引っ越しのときぐらいのものなの

だ。

縁側のガラス戸にうつる顔が病人のように蒼ざめている。恐怖や焦燥のためばかりではなく、呼吸づかいが苦しくなっているからだ。

しかし、なんとしても掘らなければならなかった。

三十分経ったが、作業はさっぱり捗^{はかど}っていない。掌にはマメができたし、足の裏はちぎれそうに痛かった。

△どうしてあんなことをしてしまったんだろう……▽

激しい後悔に胸を締めつけられるのだ。

一瞬の激情と怒りがつくり出した行為であっただけに悔いは一層深かった。

万一、夫がそれを知ったら、おそらく愕然とするにちがいがなかった。いや、愕然などというなまやさしさではすまないはずであった。

△なぜ殺すなんて取り返しをつかない大それたことをやってしまったのだろう……▽

嫌悪と嫉妬は前々から感じてはいたものの、殺してやれとまで思い詰めたことは一度もなかったのだ。そうだった。行為はほとんど衝動的に行なわれてしまったのだった。

あらためて、昨夜の悪夢のような時間がよみがえる。

『生意気よ!』

と彼女が叫んだときから、事件ははじまったといっていいたいだろう。

相手はしかし態度をかえようとしなかった。

「夫がいなと思うてあたしをバカにしているのね」

蒼白い憎しみが腹の底から燃えあがった。

「おまえなんかに敗けてたまるものか」

『うちのひとが甘やかしているからいい気になってるのね』

タケは、しかし、横を向いたまま平然と姿勢をくずさなかった。かよ子にはそれが不敵な挑戦とも受け取れた。

野ねずみを殺す目的で夫がどこからか手に入れた劇薬のことを、ふと、かよ子は思い出した。

『くれぐれもまちがったりしないように気をつけてくれよ』と夫に念を押されていて、その蔵い場所を教えられていた。

熱にうかされたようなアブノーマルな心理状態の中で、彼女はタケの夕食にその粉末をまぜてしまったのだった。

死体になってしまったタケを見てから、自分の犯した行為の重大さに慄然としたのだが、もうおそい。死体を二度と生き返らせるわけにはいかないのだ。

夫には絶対に知られてはならないことであった。夫に訊かれたら、『もとの主人のところへでも行っただんじやないかしら』と、とぼけた返事をしようと考えた。幸い、タケには放浪癖があった。夫は少しばかり不機嫌になるかも知れないが、納得してくれることはたしかだろう。

ここへ越してきてから、三月と経っていないことも、多分彼女を助けてくれるはずであった。

隣近所とはまだそれ程親しくしていないから、彼らがタケの突然の失踪に格別な興味や不審を抱